

婚約者の同僚出張、二日目の夜 に既読がついた

会えない夜、彼女は仕事のできる上司の部屋にいた——和
姦NTR

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

彼女は、誰にも負けない程に輝いていた。

鏡の前で髪を直している仕草が、普段よりも一層堂々としており、まるで何か特別な運命がこの部屋を包み込もうとしているかのようだ。婚約者という肩書きを持ちながら、実は彼こそが今、最も彼女に対して無防備になっているのが滑稽だった。

この頃、彼女の視線はいつも奥深く澄んでいて、その瞳の奥に揺れる微かな熱気には、日常の些細な出来事すらも彩りを増しつけていた。

「健吾、見てごらん」

その声は低く、そして少しだけ震えていた。彼は彼女が差し出す手を捉え、指先が触れ合う感触が滑らかで冷たい朝風のようなものを感じ取った。

「最近、君の気配はどこにあるんだ」

彼は問いかけた。それに対し、彼女はふっと唇を手で隠したように笑みを見せた。

「いつものように、隣にいてくれると安心するものだと思うってたのに」

言葉通り、彼らは同居しており、朝と晩の食事もほぼ同じテーブルを囲んでいたはずだ。しかし、彼女の中で何が起ころうとしているのか、夫である彼はまだそれを察する術を持っていなかった。

それは、ある男との出張旅行から始まった不可解な変化だったのだ。

ただ数日間の別離が、二人の関係の地軸を少しずつずらしていくだけであり、それが現在進行形で彼の意識を侵食していることに気づけなかった。

「……そうか」

彼女はそっと口元を濡らし、再び彼の顔をじっと覗き込んだ。その視線からは、既読スルーされたような哀愁と、同時に満たされかけない渴望が交錯していた。

「でもさ、今夜なら違うだろう」

彼女の声は、かつてよりも遥かに色濃く帯びてきた。まるで誰かの名前を呼びかけるようには聞こえないのに、どこかで呼ばれているような感覚を彼は抱いた。

窓の外では秋の空が高く伸び、涼しい風が紗のように部屋の中を流れていた。

「君は、まだ私を見てるの？」

問いかけられた彼は、わずかに頷いた。その瞬間、彼女の胸に手を当てた指先が、自分の鼓動とは異なる早さを感じ

じた気がした。

「ふふ、やっぱり私は敏感なのね」

自嘲気味に呟くと、彼女は彼の肩を力強く押さえ、彼を少しだけ前へ押し出した。

そこには、職場という名の密室で繰り広げられる、静かなる戦いの予感が漂っていた。

「あの男との間にある距離感、どれくらい感じるかしら」

会話はそんな些細なことから始まるが、彼女の本意はその奥深くにあった。

「……二重三重」

健吾は苦笑して答えた。だが、それは単なる冗談ではなく、二人の関係がもはや単純なものではいられないことを示す言葉だった。

彼女の肌に触れた手のひらが、今までよりもずっと熱いように感じられ、それが彼の首筋へと伝わり、背骨に沿って下っていくのが妙だ。

「さあ、このままじゃダメよ」

そう言い放った彼女は、鏡に映る二人の姿を見つめながら、どこか遠くを見ているような仕草をした。

普段なら「綺麗だな」と評されるような整った顔立ちが、今は妖艶かつ切なく見えてくる。

「いつもの夜は、二人きりで寝たものなもの」

その言葉に、彼はふっと息を呑んだ。確かに、毎晩ベッドサイドでの囁きや、朝までの絡み合いがあったはずなのに、なぜか今日はそれらの慣れ親しんだリットラルさが薄らいでいるのだ。

「今夜こそは、君の心を揺さぶるのが私の役目ね」

美咲の唇が微かに震え、次の一步を踏み出す準備をしていた。

それは、理性の糸がほどけ始めている瞬間で、彼女自身にも何が起きようとしているのか解明できていない不安が滲んでいた。

「……わかった」

彼が応えた途端、部屋の空気が一層甘酸っぱく充満してくる。

秋の夜の涼しさがかえって、二人の体温を際立たせ、まるで火照り始めていくように感じる。

彼女の視線がまた彼の首筋へと戻り、そっと顎を捉える指先の強さが、かつてよりも少しだけ増していることに気づいた。

「そう、このままじゃダメよね」

呟きは小さく、しかし意味深なものであった。

そこには、婚約者の優越感と、それを飲み込まれかけている彼女への共感だけが交錯し、世界を歪ませているよう

な気がした。

「健吾、覚悟して」

彼女は再び囁き、その息遣いが彼の耳元で弾ける音がする。

すべてが静まり返っているようで、実際は誰一人として動かないまま、感情という潮水に飲み込まれていく予感がしたのだ。

そして、最後に残ったのは、彼女が差し出された、濡れたような温かい手のひらの触感だけで、物語はこの夜の本番へ導かれる。



——ここから先は製品版でお楽しみください——